

ここでは、『機那サフラン酒本舗の装飾やしつらえは、薬師如来に関係しているのではないか』という、全くの独断に近いことを、お話ししています。

ただ、機那サフラン酒本舗の創業者で、この屋敷の構想を練った初代吉澤仁太郎は、この「装飾やしつらえ」について、文書や対談人たちの日記や話としても、何一つ、残していないのです。

また、仁太郎さんの周囲にいた人たちの文書や言い伝えにも、これらへの言及は、今まで発見されていません。

ここまで徹底しますと、もしかしたら仁太郎さんは、「装飾やしつらえについては、一切他言無用」と、家族にも社員にも厳しく言明したとしか思えなくなりました。

そして、本文に記述しましたように、「装飾やしつらえ」を薬師如来を荘厳するものと捉えると、全て辻褄が合うことに気づきまして、『薬師如来仮説』にまとめた次第です。

1. サフラン酒本舗に棲む双龍

- (1) 双龍 大看板 (M44,1911)
 多くの建物の鬼瓦 (T2-)
 主屋仏間の欄間 (T2,1913)
 鍔絵蔵の軒下部 (T15,1926)

こんなに
 多くの
 双龍の
 理由は?

もしかしたら
 薬師如来
 の働きを
 示すもの
 ではないか

- (2) 求める宝珠を見つけました

離れ座敷二階の廊下にある手摺りの宝珠

2. 何が仁太郎に薬師如来を意識させたか

- (1) 祖父母に連れられて行った村松の湯の薬効、そこのお寺
 (2) 村松の古刹、園融寺本堂の薬師如来と欄間の双龍

いつ、
 仁太郎さんは
 意識したか

3. 薬師如来を荘厳するアトリビュート

- (1) 奈良、薬師寺本尊の薬師如来坐像の台座のシンボル
 葡萄唐草文様、四神
 (2) 新薬師寺の十二神将について
 十二神将と十二支
 (3) 新潟、米山薬師護摩堂の外壁の荘厳について
 四神、十二支

これこそ
 衣装蔵、
 鍔絵蔵の
 装飾
 そのもの

～薬師如来
 への祈り

4. 機那サフラン酒本舗の「しつらえ・くふう」の仮説的結論

- (1) 薬師如来のアトリビュート(属性・シンボル)の具体化
 (2) もうひとつのテーマの「祈りと感謝」の具体化
 (3) 想像ですが、もうひとつ、「青雲之志」
 志を忍ばせた衣装蔵、鍔絵蔵の四神、
 離れの「竹に雀」の欄間
 (4) ラストピース

・薬師如来への
 誓い、祈り、感謝
 ・広告塔
 ・顧客へのサービス
 ・共同体の近隣住民
 への娯楽の提供

章立ては異なりますが、図を含めてプレゼン風にまとめた
 『薬師如来仮説』のパワーポイント版を添付します。

0. はじめに

私の『薬師如来仮説』、サフラン酒はテーマパーク

サフラン酒の屋敷には、龍、特に二頭の龍が組になった双龍が目立ちます。最初に仁太郎少年が双龍を見たのは、祖父母に連れられて近隣の村松町の医王山圓融寺を訪れたときではないでしょうか。

幼少のころ、もしかしたら病気がちで、湯治場として知られた村松の湯に治療に行って、治療や薬に関心を持ったのかも知れません。

（「治療に村松の湯へ」、は私自身の子供のころの、ある夏の記憶でもあります。）

さらに、養子に行った母の実家から奉公に出た千手のお店も、薬種問屋という、薬・薬種との縁が続きます。

それらが薬種に関心を持ち、子供のころの記憶にあった、施薬の象徴でもある薬師如来、そして脇侍とも云うべき「昇り龍と降り龍」をあがめるようになった。

それが、その後のサフラン酒創業と、建造物への双龍を含む龍の装飾の原点では、というのが、私の『薬師如来仮説』です。

まだ、誰も論じていない説で、私の勝手な仮説です。でも、以下を読んでいただいたら、少し納得下さる方が、いらっしゃるかも……。

いつの日か、サフラン酒の定説になれば、うれしい、それが、今の私の気持ちです。

近隣の村松町の医王山圓融寺への参詣が、恐らく「昇り龍と降り龍」の原点。

圓融寺本堂、内陣外陣の間の欄間にいる「昇り龍と降り龍」は、拝観者を圧倒します。



729年行基により開創、当初天台宗で976年頃、円融天皇の勅願所となった。後に真言宗。高野山宝亀院末寺を経て、現在智山派 総本山京都智積院末寺。本尊は薬師如来。内陣と外陣の間の欄間に「昇り龍と降り龍」（江戸末期の作）

先に『サフラン酒はテーマパーク』という文書(*1)において、サフラン酒の屋敷をテーマパークと捉え、その二面性として、「遊びと奉仕」、「祈りと感謝」を論じました。

ここでは、その概要を、2枚の図表で示します。

そのあとで、その「祈りと感謝」の根幹であり、薬師如来の脇を飾っています「昇り龍・降り龍」について、画像を中心に説明し、機那サフラン酒本舗の「しつらえ・くふう」の多くは、薬師如来に関するアトリビュート(属性・シンボル)の具体化という、仮説をお話しします。

(*1) [MfG_J_SaffronShu_site_is_an_excellent_theme_park](#)

仁太郎ワールドの二面性

○ 表面の姿として、「遊びと奉仕」
仁太郎さんの趣味と、
顧客や訪問者への、奉仕(おもてなし)

～ 成金趣味と見られやすいが、それは表面的。

○ 隠れている姿として、「祈りと感謝」
仁太郎さんの信仰、祈り、人生観のベースとして、
薬師如来、双龍、そして四神・四霊と十二支への
祈りと感謝

～ 見えにくいですが、溢れる「祈りと感謝」。

薬師如来への「祈りと感謝」

「昇り龍・降り龍」をはじめ、薬師如来に関するアトリビュート(属性・シンボル)の具体化

二面性のテーマパーク
「遊びと奉仕」、「祈りと感謝」

隠れた存在

目にする存在

地域の安寧

商売繁盛

子孫繁栄

近隣住民への感謝

顧客・取引への感謝

薬師如来への感謝

© Kasuga

MfG_J_pair_dragons_in_saffron.ppt



サフラン酒の「昇り龍と降り龍」

機那サフラン酒本舗には、多くの龍がいます。特に、「昇り龍と降り龍」と思われる二頭の龍が一緒にいるケースが目立ちます。本文は、これに対する一つの個人的見方です。

2022年8月 春日

0. はじめに

私の『薬師如来仮説』、サフラン酒はテーマパーク

1. いくつかの双龍、「昇り龍と降り龍」、そして宝珠

2. 薬師如来とアトリビュート

3. 「しつらえ・くふう」の仮説的結論

(1) 薬師如来のアトリビュート(属性・シンボル)の具体化

(2) もうひとつのテーマの「祈りと感謝」の具体化

(3) 想像ですが、もうひとつ、「青雲之志」

(4) ラストピース

付録 米山薬師の木彫装飾

～別当寺密蔵院米山寺護摩堂

1. いくつかの双龍、「昇り龍と降り龍」、 そして宝珠

右図は、かつて通用門の脇に立っていた
巨大な木彫の「大看板」の一部です。

中央部の大きさは 6.40mx1.94m。

(今は、道具蔵に横たわっています。)

明治44年作の「昇り龍と降り龍」は、
サフラン酒本舗の屋敷の中で、鬼瓦を
除いて、恐らく最初の双龍です。



二頭の龍

大看板 (M44,1911)
多くの建物の鬼瓦 (T2-)
主屋仏間の欄間 (T2,1913)
鍔絵蔵の軒下部 (T15,1926)

薬師如来の守護神の登り龍
と降り龍と考えられる。
宝珠 (S6, 1931)もある。

符合例

長岡市村松・円融寺、本尊の
薬師如来を荘厳する欄間の双龍

鍔絵の絵柄 (T5-, 1916)

葡萄つるのアラベスク文様
四神・四霊 (T5)
十二支 (T15,1926)

これらは薬師如来を荘厳する
アトリビュート(属性)、そのもの。

符合例

奈良・薬師寺の本尊、薬師三尊像、
薬師如来の台座の飾りと符合



屋根の上の鬼瓦に、
双龍(対の龍)



大正2年の主屋増築に伴い藁屋根から瓦ぶき屋根への変更と同時に「鬼瓦」を備えたことになりますが、その以前に建造した建物に、鬼瓦が当初から載っていたか否かは不明です。

しかし本表の年代から、鬼瓦を除き、双龍を明確に作り始めたのは、大看板建造の明治44年(1911)以降であることがわかります。



鰻絵蔵の軒下に、
双龍(対の龍)



主屋仏間の欄間に、
双龍(対の龍)の浮彫



村松町の圓融寺の内陣・外陣の間の
欄間を思い出します。
本堂の「昇り龍と降り龍」を、自分の家
の仏間に再現させたのです。



大きな鬼瓦には、全て双龍です。
大看板、仏間の欄間、そして鰻絵蔵と、
これだけ多くの「昇り龍と降り龍」を形に
したのには、何か、わけがあるはずで

それは、薬師如来への祈りに違いないと、
密かに思っています。

「昇り龍と降り龍」

薬師如来のはたらきを象徴するもの

人々を病から救い、困窮に手を差し伸べる薬師如来

「人々を救うため宝珠を求める登り龍と、

それを得て下界に戻って人々を救う降り龍」

薬師如来

宝珠

サフラン酒にある「宝珠」

離れ座敷二階の廊下、雲形を彫った手摺りの端々に、龍が求める宝珠の木彫があります。

雲形も龍に欠かせないものですが、この手摺りの宝珠こそ「昇り龍と降り龍」が求めるものであることに気づき、サフラン酒のテーマが薬師如来であることを、確信しました。



凝った曲面であり、この美しい曲面にも意味があると思うのですが、未だ「探索中」です。

2. 薬師如来のアトリビュート

ここでは、奈良・薬師寺本堂の薬師三尊像の台座、そして新薬師寺の十二神将について、着目します。

薬師如来の代表的な持ち物・アトリビュートは薬壺ですが、ここでは、台座、そして周囲の守護神が主役です。

薬師寺 薬師三尊像と薬師如来の台座の荘厳



葡萄唐草文様



北面玄武



南面朱雀



東面青龍



西面白虎



十二支に通じる
十二神将は、
薬師如来の
眷属、従者

一番上の框[かまち]にはギリシャの葡萄唐草文様。
腰板の4面には釣鐘のような輪郭の窓があり、その中小鬼が二匹ずつ。
(仏の力で降伏させられた、インドの異教の神)
腰板のすぐ下の框の四面には、四神。



(注)

葡萄唐草文様

ちなみに、葡萄は、薬師如来の持ち物でもあります。
覚禅抄(鎌倉初期、真言宗の諸経法, 諸尊法, 灌頂などの作法研究書)によれば、
薬師仏は、左手に宝印(薬壺)、右手に葡萄を持つ、
葡萄は諸病悉除の法薬なり、と書かれているとのこと。
(足田輝一, "シルクロードの博物誌", 朝日選書1993)

葡萄唐草文様の源流は、西アジアにあるようです。
ブドウの栽培化の歴史は古く、紀元前3000年頃には原産地であるコーカサス地方や
カスピ海沿岸ですでにヨーロッパブドウの栽培が開始されていた。ワインの醸造は早くに
始まり、メソポタミア文明や古代エジプトにおいてもワインは珍重されていた。
一方、原産地から東へと伝播したものは、紀元前2世紀には中国に到達した。

(注)

十二神将と十二支 動物 隋唐

十二神将は、もともと方位の守護神で、薬師如来の眷属とされます。。
十二という数字は、薬師如来が人々を救うために立てた十二の誓いに対応したもので、東アジア地域では、古くから時間や方角を十二に区分していた。
また、十二支については、もともと方位の守護神十二神将との関連があります。
十二神将は、薬師寺の薬師如来には見られませんが、新薬師寺では、三尊像の周囲に、十二神将がいます。
十二支が動物と関連付けられるようになったのは、隋唐時代とされています。

奈良・新薬師寺

薬師如来の周囲には
十二神将が配置
されています。
薬師如来を守護すると
考えられています。



このように、薬師三尊像の中央に薬師如来が座る台座には、いろいろなシンボルが飾られています。

驚くべきことに、葡萄唐草の文様、四神が、鏝絵蔵を装飾する鏝絵の絵柄と一致しているのです。

機那サフラン酒では、全ての鏝絵装飾の上（まぐさ部）に、葡萄唐草のアラベスク文様が飾られています。

今は崩壊改修途中の衣装蔵の軒下(鉢巻部)も、葡萄唐草でした。

台座のシンボルを模したのではないかとさえ、思えるのです。

付録 米山薬師の木彫装飾
～別当寺密蔵院米山寺護摩堂

護摩堂は、今から200年前に、二年をかけて文化14年(1817)に完工したものの。

護摩堂の三面を使ったケヤキの大彫刻は三段構成で、上段に十二支、中段に四神、下段に中国英雄物語。薬師如来の脇侍は、右に不動明王、左に愛染明王との、住職様の説明。

不動明王が薬師如来の脇侍の場合もあるということです。

この護摩堂の三面の木彫も、ご本尊の薬師如来の
アトリビュートと見なせば、薬師寺三尊像台座と同じ。
やはり、四神と十二支は、薬師如来に関連していると
云えます。

サフラン酒でも、四神と十二支で、薬師如来を想起
させるということだと思われます。

三面の木彫は大作で、しかも高い位置にある為、十二支
の鑑賞は困難でしたが、下の位置にある四神の彫りは、
200年前とは信じられないほどシャープでした。

三面の彫刻
3段？, 5段？



護摩堂の四神の木彫



青龍



麒麟



鳳凰



玄武



天女

四神と四霊の混合も、メンバーの交替も、サフラン酒本舗の鰻絵蔵東面と、全く同じ。。
なにか、理由があるのでしょうか。

四神と四霊の混合も、白虎を麒麟と替えるメンバー交替も、奇しくも、サフラン酒本舗の饅絵蔵東面と全く同じ。なにか、理由があるのでしょうか。

天女を彫ったのは、何を狙ったものでしょう。堀之内・永林寺の天女は、お位牌への慰めであり、菩薩。天女も、中国英雄物語も、理由が不明ですが、恐らくは、当時の住職の発願なのでしょう。

台座の荘厳の全てが、饅絵蔵の饅絵の飾りと一致

軒下の双龍
葡萄つる草のアラベスク文様
四神・四霊
十二支 …… 十二神将は
薬師如来の眷属



これらは全て、
薬師如来の
アトリビュート
と符合

+

日本の招福のシンボル
恵比寿様に大黒天、鶴と亀



薬師如来を、西から来た、人々に
救いを与える招福のシンボルとし、
日本の招福のシンボルと併せ、
福を呼ぶ大合唱と考えられないか。

「人々を救うため宝珠を求める登り龍と、
それを得て下界に戻って人々を救う降り龍」
これらは薬師如来自身の姿であり、守護神の姿でもある。



薬師如来

宝珠



どうでしょうか。

サフラン酒のさまざまな装飾が、
薬師如来に関わるものであることに、
納得いただけましたでしょうか。

3. 「しつらえ・くふう」の仮説的結論

(1) 薬師如来のアトリビュート(属性・シンボル)の具体化

「昇り龍と降り龍」だけでは、ありません。
機那サフラン酒本舗の鰻絵蔵、離れ座敷、庭園の
「しつらえ・くふう」には、吉澤仁太郎が祈った薬師如来の
アトリビュートの具体化と考えると納得できるものが、
多くあるのです。

そう思わざるを得ないものが、随所に見つかります。

双龍、十二支、四神、葡萄つる草文様のほか、 不動明王、龍、・・・

サフラン酒には、「昇り龍と降り龍」のほか、離れ座敷の屏風、庭園の噴水などに、一頭だけの龍もいます。

龍の化身とされる不動明王も、あちこちに見られます。

鋳絵蔵のコレクション展示にも、龍や不動明王の置物があります。

元来、龍は仏法の守護神であり、水神でもありますから、「昇り龍と降り龍」以外の龍も、多くいるのだと思います。

龍は仏法の守護神「八部衆」のメンバーでもあります。

有名な興福寺八部衆立像では少年の顔をした沙羯羅像(さからぞう)になっています。

不動明王は龍の化身とされますが、脇侍として薬師如来に仕えることもあります。



(2)もうひとつのテーマの「祈りと感謝」の具体化

とにかく積極果敢、だからこそ「祈り」も強かったと考えます。

事業家としての姿

薬用酒へのキニーネ添加は、サントリーの始まりの鳥居商店に先行すること15年前の、明治17年。
(鳥居商店の葡萄酒にキニーネ添加は明治32年)
そして当時めずらしかったハワイへの販路拡大、
通用門脇の大看板、事務所の土蔵に複数の鍔絵装飾による
宣伝と娯楽提供。
製品開発、製造技術、営業と、とにかく積極果敢です。
更に二代目の、清酒業の容器として瑤瑤に着目、事業化。

謙虚な「祈りと感謝」

その積極果敢な新しい事業の拡大を支えたのが、
人一倍の努力とともに、謙虚な「祈りと感謝」だったのでは。

「祈りと感謝」という言葉がお似合いの「しつらえ・くふう」が、
ふたつの蔵のほか、庭園、離れ座敷など、サフラン酒の随所に見え隠れするように感じます。

建物の建造にも、段階的な祈りと感謝

1) 主屋建造、増築当時～明治27年(1894)、大正2年(1913)
鬼瓦に据えた龍に託した、守護神、火防が中心

2) 衣装蔵建造～鍔絵蔵建造 大正5年-15年(1916-1926)
地域安寧、五穀豊穰、商売繁盛、子孫繁栄を祈る道具立て

3) 離れ、庭園建造～昭和6年(1931)
家業が繁栄してきたことから、魔除け招福、祈りと感謝

「祈りと感謝」の具体化

もともと、主屋や衣装蔵、鰻絵蔵を飾る、龍、四神、十二支は、地域の安寧、五穀豊穰から商売繁盛、子孫繁栄の祈りでもあります。

特に鰻絵蔵は、「昇り龍と降り龍」のように、商売が軌道に乗って、「祈りと感謝」の気持ちの総仕上げのようにも思えるのです。

「祈りと感謝」の具体化（その2）

鰻絵蔵の建造に加えて、庭園、離れ座敷の「しつらえ、くふう」
半分は娯楽気分、招福と魔除けが満載です。

庭園には、大量の溶岩の築山
たくさんの天下の銘石、パワーストーン
夜の露地の足元を照らす、多くの石灯笼、山灯笼・・・
離れ座敷には、多くの大木、銘木
膨大な数の「猪の目」など、驚くべき指物の技

(3) 想像ですが、もうひとつ、「青雲之志」

衣装蔵、鍔絵蔵の鍔絵に、「四神」を配していますが、龍としては、衣装蔵に鯉、鍔絵蔵に青龍です。また鳥として廃仏毀釈、衣装蔵に小鳥、鍔絵蔵に鳳凰です。なぜ別物を作ったのか。

私は、これらを、鯉が滝を昇って龍になるように、小鳥が鳳凰になるように、「いつか、大物になってみせる」、という仁太郎さんの「青雲之志」のあらわれだと思っています。

欄間の「竹林の雀」も、同じ気持ちからだと思っています。
施主が若いころから心に刻んできた「青雲之志」を、
「燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らんや」、「でも私は……」、
という気持ちを託したと、見えています。

建造物の最後の建造の迎賓館の玄関を入ってすぐのところは、
最高の見せ場でもあります。その場所に、仁太郎さんは、
お客様へのメッセージとして、奇跡の黒柿欄間を掲げています。
『これが、私の気持ちだったんですよ。皆さん、ありがとう。』
という、気持ちだったのでは、ないでしょうか。

離れ座敷の入口、廊下前の黒柿の欄間



(4) ラストピース

未解決の観点

基本は薬師如来だと思いますが、その他にも、いろいろな縁があったと思います。

なぜ、このような装飾をしたか、そして、このような起業がなぜ摂田屋で起きたか、長岡で起きたか、どういう縁か、という観点も、そのひとつ。後者については、私は、吉澤仁太郎の沸き立つような新ビジネス勃興の因子が、長岡の石油採掘だったのでは、という考えを捨てきれません。

その旗手ともいえる山田又七さんの、明治23年に石油採掘へ進出。同25年、東山の比礼に優良鉱区を獲得し、宝田石油を創業。同29年、比礼から長岡まで3インチ鉄管、国内で初のパイプライン敷設。これらの時期と、明治27年に吉澤仁太郎が現在地に創業という新展開の時期との一致は、奇縁、瑞縁と考えていいのでは、と思います。

オイルシティ長岡の追い風

明治の開国とほぼ同時に西洋から輸入された石油ランプも、街路灯などの利用からスタートし、またたく間に家庭や工場に普及しました。当時、灯油はほとんどが米国からの輸入でしたから、輸入量は増大の一途をたどりました。国内でも石油開発ができないものか検討がなされました。まさに、そんな時期です。

明治20年代に入ると、浦瀬栃尾間の榎峠での手掘開削を皮切りに、有望な油井が見つかり、石油ブームを迎えました。東山の有力な鉱業者(小坂松五郎、植栗順平、山田又七等)が、次々に石油会社・組合を起こし、石油ブームの中心となった長岡市は、まさにオイルシティとして成長していきます。

明治20年代半ば石油採掘器具を生産すべく難波鉄工所・須藤鉄工所が設立された他、従来輸入に頼っていた石油採掘・精製機械を自製するために、明治35年には日本石油が新潟鉄工所長岡分工場を設立、39年には宝田石油などが中心となり長岡鉄工所組合を立ち上げました。いずれも現在の柿川沿いの安鉄橋周辺です。付近には製油所が林立しました。

仁太郎の事業家魂

国内の過半を担った油田出荷のピークは明治32年から38年頃までで、その後は下降線を辿りますが、上記工場は一般・工作機械の製造に進出、長岡の繁栄の基となりました。

この石油産業・機械産業ブームが、明治・大正期の摂田屋の繁栄にも追い風となったと思います。

摂田屋全体も、沸き立ったのです。

それが若き日の仁太郎さんの心にも、伝わったと思うのです。

なんとかして、隣の長岡町の繁栄を追いかけたい、という事業家魂です。その成功への誓い・祈りが、建造物の随所に見て取れるように感じます。

もう一歩

最近、装飾の理由として、広告塔のほかに、事業の繁忙期に手伝ってくれる周辺住民に、普段は娯楽のない人たちに、少しでも楽しみを、という気持ちがあったのでは、とゲストに説明しはじめました。仁太郎さんが再三訪れたという、魚沼・西福寺の仁王像、猛虎調伏の図も、由来は民を苦しめる洪水退散の祈りであり、辛い生活に少しでも楽しみを、というものであり、それと同じものを考えました。

そして『衣装蔵に鯉、鰻絵蔵に青龍の対比』、あるいは『竹林の雀の心』について、創業者の若き日の誓いと壮年時代の成功への祈りと感謝という話かも知れませんが、という仮説も、関心のありそうなゲストに説明しはじめました。

するとゲストは驚きますが、私の仮説に賛成してくれます。
このような仁太郎さんの心も、サフラン酒の屋敷の重要なコンセプト
であり、大事な観光コンテンツと思うようになりました。

ガイドに、「当時の長岡の田舎の風土、その時代の長岡の空気」を
追加できれば、もっと、みんなに理解してもらいやすいストーリーに
なりそうで。 もう一歩だと思います。

サフラン酒の謎解き、絵解きのラストピース

「昇り龍と降り龍」

「青雲之志」

・・・

「長岡の、当時の時代環境」

「しつらえ、くふう」



元来、「その時代の空気」は、ガイドに必須の要件だと考えます。本推論は確かめようのないもので、ガイドの本筋と違うものを探してみたいで心苦しいのですが、何かが残されているように思えて仕方がありません。

。

京都・平等院鳳凰堂の屋根の龍とサフラン酒の鬼瓦の龍、雰囲気は酷似



平等院鳳凰堂の
屋根の龍(サイズ 60cm)



サフラン酒の鬼瓦の
龍 (米蔵の鬼瓦)

皆、二頭でワンセット、
単独ではない。

仁太郎ワールドの二面性

遊びと奉仕の
テーマパーク

さまざまな守護神

「招福・魔除け、五穀豊穰、
商売繁盛、子孫繁栄」

「地域の安寧」

人々に日々の喜びを
もたらす祈り

祈りと感謝の
テーマパーク

さまざまな結界

「四神・四霊と十二支」

如来の「昇り龍・降り龍」

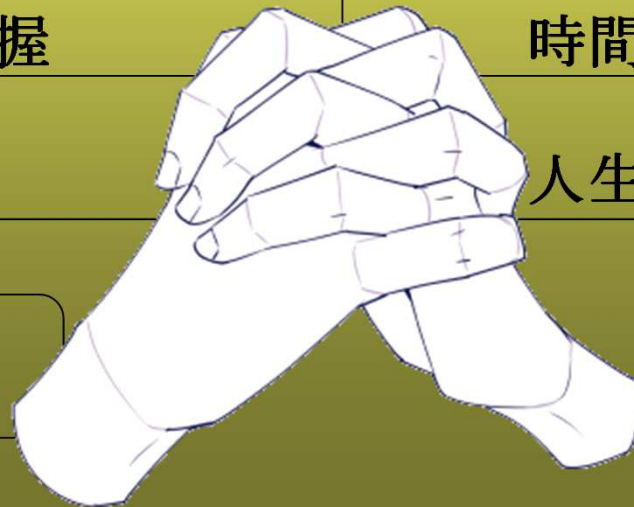
「薬師如来」への誓い

仁太郎の世界観、人生観

饅絵蔵の意匠の意図は

招福・魔除け	祈りと感謝
地域安寧	五穀豊穡

五行説・五大思想 世界の構成要素	十干十二支 農耕、勤労の奨励
空間の把握	時間・次元の把握
世界観	人生観



四神・四霊

十二支